

# 保育の現場における多職種協働の実現に向けて

—保育カウンセラーの活動についての実践報告—

Towards realization of multi-occupational collaboration at nursery schools

—Practice report on activities of nursery school counselor—

中島 卓裕 Takahiro Nakajima  
(名古屋大学)

古川 洋子 Yoko Furukawa  
(家政学部こどもの生活専攻)

## 抄 録

近年、多くの領域において“多職種連携”の重要性が述べられている。医療現場においては、医師や看護師だけでなく、薬剤師、臨床心理士、作業療法士、医療福祉士などの多職種の協働が基本となっている。そのような中、保育の現場においても多職種連携の動きが生じ始めている。医療的ケアを必要とする子どものために看護師が保育園に在籍し、多くの保育士と連携して保育の質の向上に努めているケースもある。また、臨床心理士に代表される心理職が年に数回、園を巡回して発達相談を受ける巡回相談などが行われている市町村もある。さらに最近では巡回形式ではなく、「保育園に頻繁に訪れ、保育にまつわる相談を受ける保育カウンセラーの存在も見受けられるようになってきた」と述べている（増沢，2018）<sup>1)</sup>。保育カウンセラーは、未だ全国的に普及しているとは言えないが、今後保育現場にとって必要とされるものだと考える。

## キーワード

保育カウンセラー Nursery school counselor 多職種協働 Multi-occupational collaboration  
子育て支援 child care support

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 保育所における支援活動
- 3 将来の保育の担い手への支援活動
- 4 おわりに

### 1 はじめに

少子化や核家族化、晩婚化、ひとり親家庭の増加などに伴い、子どもをとりまく環境が大きく変化している。そのような環境のもと、地域のつながりが希薄化し、家庭における子育ての負担や不安を感じている保護者が増加している。このような現状の中、「保育所保育指針解説書第4章子育て支援 1 保育所における子育て支援に関する基本的事項(2)子育て支援に関して留意すべき事項」の中では、次のように示された<sup>2)</sup>。

保護者に対する子育て支援を適切に行うためには、

保育所の機能や専門性を十分に生かすことが重要である。その上で、自らの役割や専門性の範囲に加え、関係機関及び関係者の役割や機能をよく理解し、保育所のみで抱え込むことなく、連携や協働を常に意識して、様々な社会資源を活用しながら支援を行うことが求められる。

このように、様々な社会資源との連携や協働のうえに、支援が行われるべきであることが明記されている。保育カウンセラーは、未だ全国的に普及しているとは言えないが、今後保育現場にとって必要と

されるものだと考える。本研究では、中島がA県の中規模都市にある保育園での保育カウンセリングの実践から得られた知見について報告を行う。

## 2 保育所における支援活動

### 2.1 保護者支援

保育カウンセラーの活動において、まず第一に挙げられるのが保護者支援である。厚生労働省の報告によると、平成29年度中に全国の児童相談所で対応した児童虐待相談件数は、前年度から約11000件増加して133778件であり過去最多を示している。これに示されるように、サポートの必要な子育て家庭が増えている現状において、子ども及び保護者と密接な関わりをもつ保育園に求められる役割は大きい。

保育カウンセラーに先駆けて普及されているスクールカウンセラー事業においても、保護者支援は中心的な活動のひとつとして位置づけられている。しかし、保育園では学校とは異なり毎日保護者が送り迎えをしているという点から、園と保護者はより密接に関係を維持することが求められる。実際に、筆者が活動する園においても、これまで多くの保護者面接が行われてきた。その内容の多くは子どもの発達や就学に向けての進路などが主であったが、その他にも家族や夫婦関係について、保護者自身のことについてなど、相談内容は多岐にわたっている。

相談の内容によって面接の形態も異なり、保護者とカウンセラーの1対1で行う個別面接のときもあれば、夫婦面接になることもある。相談内容によっては、保育者が加わって面接に同席する場合もある。面接に先立って保護者から相談が持ちかけられたときに、その窓口になるのは、従来同様に担任の保育者もしくは管理職である。その中で、保護者から心理士との面接の希望が出たときや、心理的なサポートが必要であると保育者が考えた場合に、心理士との面接の日程調整が行われる。そして、保育時間中もしくは延長保育を利用して、園の一室にて保護者面接が行われるのである。

子どもの育ちというのは非常に喜ばしい事象である一方で、その過程の中では保護者に多くの葛藤を生じさせることもある。その葛藤に寄り添い、共に揺れ、子どもの育ちや葛藤について一緒に考えていく。そして、必要があれば専門的知見に基づく支援を行っていく。子どもが育つと同じように、親が親になるプロセスに寄り添い支えることが、保育の

現場における保護者支援の意義なのではないだろうか。

### 2.2 子ども支援

保育の現場における主たる子どもの支援者としては、第一に保育者が挙げられるだろう。保育カウンセラーとして子どもを支援する際、最もよく担う役割は、コンサルテーションとしての子ども支援の立場である。対象となる子どもの現在の状態、課題及び支援の目標を保育者と共有し、支援について検討をしていくことがコンサルテーションにおける保育カウンセラーに求められる役割であると考えられる。またその際に、重要になるのが、その子ども及び子どもを取り巻く環境に対するアセスメントである。富田・杉原(2016)によると、保育の現場におけるアセスメントの目的とは、「子ども(母親・父親)を援助するために、子どもの抱えている問題を客観的に総合的に判断し、子どもの発達をより有効に援助するための情報を整理・統合し、より有効な援助の方向性を探ることである」と述べている。またその具体例として、これまでの保育記録などを整理、総括し、さらにより客観的な資料として発達についての記録や保護者の養育態度などの環境面での記録を収集・統合し、子どもの姿をより詳細に捉えることが挙げられている。保育の現場で、保育及び支援を行っていく上で、子どもの発達を客観的に理解し、家庭環境を含め子どもを取り巻く状況を総合的に捉えて支援の方向性を検討していくことが重要なのである。

子ども及び家族の発達のアセスメントを行う際に注意する点として、子どもは変化する存在であるという視点を忘れないということが挙げられる。保育カウンセラーとして発達検査などを実施することもあるが、その検査から得られる結果はその時点での、子どもの発達の状態についての情報である。これまでの子どもの発達やこれまでの家族の様子を含め、今後の目標について検討をしていくことが重要である。また、保育の現場ではしばしば就学時点を目標に支援を考えることがあるが、もちろんその子ども及び家族の生活は就学後も続いていく。就学時点で支援を途切れさせてしまうのではなく、就学のその先まで見通しを持ってその子ども及び家族の発達をイメージし、現在必要な支援について検討していくことが大切である。

子ども及び家族の変化を前提として、これまでの発達、現在の状態・状況を含めて就学後までの見通

しを持った子どもの姿をイメージする。その上で現在必要な支援について保育者と共に検討を行っていくことが、子ども支援において保育カウンセラーに求められる役割なのではないだろうか。

### 2.3 保育者の支援について

先に述べたように、保育の現場における子どもの主たる支援者は保育者である。その保育者のサポートを行っていくことも、保育の現場で活動する保育カウンセラーの役割のひとつである。保育者に対する支援には、大きく分けて2つの方向性がある。

ひとつは、園内研修会などを通して、保育者の専門性をより高めていくことである。保育者の専門である保育に対し、その近接領域である心理学、中でも発達心理学や臨床心理学といった他領域の知識や技術を共有し、統合していくことで、より質の高い保育へとつながっていく。園内研修会を行うことは保育者の専門性の向上に寄与するだけでなく、保育カウンセラーにとっても大きな利点がある。それは、専門性の違う立場である心理士の視点を共有することで、保育の現場における保育者と保育カウンセラーのコミュニケーションがより円滑に行いやすくなるのである。お互いの専門性を共有し、それらを統合して今後の保育について検討していくことが出来るのが、園内研修会を通じた保育者支援の方向性である。

ふたつめは、保育者自身のメンタルヘルスに対するサポートである。全国保育士養成協議会(2009)によると、保育士の離職理由の第一位には「職場の人間関係」<sup>4)</sup>が挙げられている。木曾(2018)は、保育者の早期離職に関する先行研究のレビューから、その理由として挙げられる『人間関係』と『身体の不調』のふたつの間には関連が見られる可能性<sup>5)</sup>を示唆している。つまり、保育者の早期離職の背景として、人間関係にまつわるストレスにより身体に不調を生じ、退職につながっているという可能性があることが考えられるのである。複雑な人間関係の中で様々な人との関わりが求められる保育の現場において、保育者の心理的負荷を軽減する支援を検討することは非常に重要である。その点においても、保育カウンセラーに期待される役割は大きい。保育者が心身の不調を生じた際の個別支援はもちろんのこと、不調を生じる前に環境調整を行ったり、負荷を減らすといった予防的な介入も重要となったりする。保育の質を向上させていく上で、保育の現場における主

たる支援者である保育者を支えることも、保育カウンセラーの重要な役割のひとつなのではないだろうか。

## 3 将来の保育の担い手への支援

### 3.1 学生の現状

入学当初の学生に、「どのような保育者になりたいですか?」と質問する。多くの学生が、「元気で明るい保育者」、「いつも笑顔で優しい保育者」と応える学生が多い。また、保育者は子ども好きであれば良いというイメージをもっている。しかし、近年保育者に求められる役割は大きくなってきている。「保育所保育指針解説書第1章総則(1)保育所の役割」では、保育士の専門性について次のように示された<sup>6)</sup>。

- ①これからの社会に求められる資質を踏まえながら、乳幼児期の子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、一人一人の子どもの発達を援助する知識及び技術
- ②子どもの発達過程や意欲を踏まえ、子ども自らが生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識及び技術
- ③保育所内外の空間や様々な設備、遊具、素材等の物的環境、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく知識及び技術
- ④子どもの経験や興味や関心に応じて、様々な遊びを豊かに展開していくための知識及び技術
- ⑤子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識及び技術
- ⑥保護者等への相談助言に関する知識及び技術

さらに、文部科学省より報告された「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために—」によると、「幼稚園を取り巻く環境の変化と幼稚園教員に求められる専門性」について、次のように示されている<sup>7)</sup>。

幼稚園教員は、幼児を理解し、活動の場面に応じた適切な指導を行う力をもつことが重要であり、さらに、家庭との連携を十分に図りつつ教育を展開する力なども求められている。具体的には、幼児を内面から理解し、総合的に指導す

る力、具体的に保育を構想する力、実践力、得意分野の育成、教員集団の一員としての協働性、特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力、小学校や保育所との連携を推進する力、保護者及び地域社会との関係を構築する力、園長など管理職が発揮するリーダーシップ、人権に対する理解などが、教員に求められる専門性として挙げられる。

このように、保育者は様々な知識や技術が求められている。4年間の学びの中で学生に伝えることは困難ではあるが、学生自身がどういった目的をもって、どのように学んでいき、どんな保育者像をめざしているかによって大きく成長が違ってくる。本学では、2年生の2月に保育実習Ⅰ、3年生2月に保育実習Ⅱ、4年生の5月に幼稚園実習を行っている。初めての实習が終えた学生は次のような感想を書いている。

- ・保育士の仕事が大変だということはわかっていたが、毎日やることが多くて驚いた。子どもだけではなく、保護者の話を聞いたり、保育園でおこった出来事を保護者に話したり、子どもが昼寝をしている時に、保育士同士で子どもの気になる様子を伝えたりしていた。大変な仕事ではあるが、「ありがとう」「また遊ぼう」と子どもに言ってもらえることは、とても嬉しかった。

- ・朝、お母さんと登園してきたAちゃんが泣いていた。すぐに先生はそばにいて、Aちゃんに話しかけていた。少しすると泣き止んだので、お母さんもほっとした表情になっていた。その様子を見て、先生の行動はAちゃんだけではなく、お母さんも安心して仕事にいくことができたと思う。私も、先生のように子どもだけではなく、お母さんにも安心してもらえる保育士になりたいと思った。

- ・先生は、ただ子どもと一緒に遊んでいるだけだと思っていたが、遊びの中には、先生の工夫がたくさんあった。特に新しい遊び(ルールのある遊び)子どもに伝える時は、子どもに伝わるように説明したり、やりたくなるように細かく計画していることがわかった。先生のようにうまくいかなかったが、先生にアドバイスしてもらって、「しっぽとり」のゲームをした。色々想定して活動を行なったので、思っていたより楽しく活動ができた。

学生の感想にあるように、実習のなかで様々なことを学んでいる。本来は、実習以外でも子どもや保育者と関わる機会を設けたいが、授業内で取り組むことは難しい現状である。そのため、希望する学生と共に、夏休みや春休み、土曜日等に中島が活動を行っている保育園に学生と共に訪ねたり、岡崎市内にある子育て支援センターで活動を行ったりしている。

学生は、子どもや保護者、保育士と実際に関わることで、「子どもの内面を理解したい」、「もっと喜んでもらえる活動を実践したい」と、学生は考えるようになる。さらに、保護者と交流することで、「保護者への対応力」の難しさを感じながらも、「保護者の気持ちを理解したい」と、変化があらわれる学生もいる。

### 3.2 公開保育への参加

本学の学生は、中島が活動している保育園で行われる公開保育に毎年参加している。公開保育には、外部の保育士、近隣の小学校、中学校の教師、大学講師、保健師等、様々な職種の方が参加する。午前中は、公開保育、午後は園内の保育士、公開保育に参加した方も参加し、園内研修が行われる。この研修会は、中島が中心になって実施してきた。園内の保育士だけでなく、外部からも様々な専門家が集まる場であるため、研修会のテーマは毎年「多職種連携」や「地域ネットワーク」に関連するものを選択してきた。その意図としては、子どもに関わる様々な専門家が、それぞれどのような専門性を持ち、子どもやその家族のどのような側面に注目し、そしてどのようにアプローチを行うのかについて相互に理解を深めることであった。

例年80人前後の参加者が集い、様々な職種が混在するようにグループ分けを行い、5、6人程度の小グループで、ワークに参加してもらうように設定している。ある年には、「10年後の理想の地域ネットワーク」というテーマで、各グループでディスカッションをし、構想した理想の地域連携についてポスターを作製し、他グループに対してプレゼンテーションを行った。本学の学生も、サポートを受けながら、積極的にプレゼンテーションを行っていた。それぞれの参加者が考える理想の地域ネットワークは多様で、ひとつの形にまとめるまでの過程の中で、非常に有意義な話し合いが展開されていた。

学生は、様々な分野の参加者の話を聞くことで、

保育に関する理解を深めたり、疑問点を解決したりする。さらに、子どもや保護者が抱える問題は、保育士だけが解決するのではないと知り、子どもの健やかな育ちを実現するためには、一人では解決することは難しく、様々な人たちとのつながりが大切だということに気がつく。このように、園内だけでなく地域の専門家同士が連携し、これから保育者を目指す学生を加えることで、保育者になる不安をわずかではあるが、取りのぞくこともできるのではないだろうか。保育者を目指す学生をつなぐ役としても、保育カウンセラーとして何かできるのではないかと考える。

スキルの両方に影響を与え、生涯を通じて学業や働きぶりや社会的行動に肯定的な結果をもたらす<sup>7)</sup>ことを示し、幼少期の環境や経験の重要性を強く訴えている。乳幼児期の子どもが多く時間を過ごす保育の現場において、その保育の質を高めていくことは子どもの発達や家族の育ちに対して大きな肯定的影響をもたらすものであると考えられる。保育の専門家である保育者と共に子どもや家族の育ちを見守り、時に支え、より安心できる保育の環境を作っていくことが、保育カウンセラーに求められる大切な役割なのではないだろうか。



写真1 研修会の様子



写真3 保育士から話を聞く学生

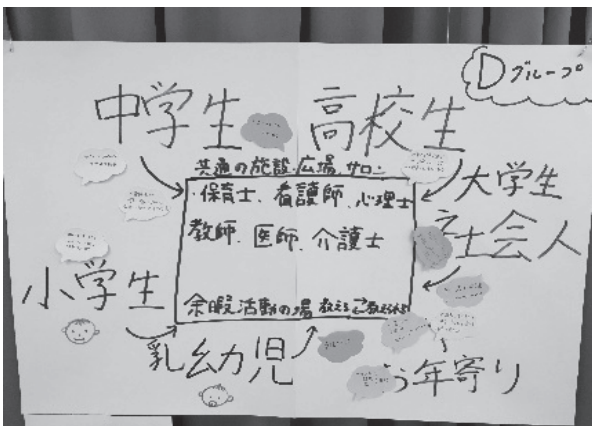


写真2 作製したポスター

#### 4 おわりに

これまで、保育の現場における多職種連携の重要性について、保育カウンセラーとの協働を通して検討を行ってきた。本稿では保育現場における保育カウンセラーとの協働について取り上げているが、今後より多くの職種との連携が求められることとなる可能性がある。Heckman(2015)は、「幼少期の環境や経験を豊かにすることが認知的スキルと非認知的

#### 引用文献

- 1) 増沢高:社会的養護の子どもたちの保育における保育カウンセラーの役割:横浜市旭区の実践から『子育て支援と心理臨床』15, 100-104 (2018)
- 2) 保育所保育指針解説書 厚生労働省編 (2018)
- 3) 富田久枝・杉原一昭:『保育カウンセリングへの招待』北大路書房(2018)
- 4) 全国保育士養成協議会:指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査報告書I『保育士養成資料集』50 (2009)
- 5) 木曾陽子:保育者の早期離職に関する研究の動向:早期離職の実態、要因、防止策に着目して『社会問題研究』67, 11-22 (2018)
- 6) 保育所保育指針解説書 厚生労働省編 (2018)
- 7) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm) (閲覧日 2018.11.30)
- 7) James J.Heckman:『幼児教育の経済学(古草秀子訳)』東洋経済新報社(2015)

(原稿受理年月日 2018年12月5日)